

大分市佐賀関大規模火災の調査と今後に向けて

建築研究所
主任研究員 水上 点晴

令和7年11月18日に、大分県大分市佐賀関で発生した大規模火災では、187棟の建物が焼損し、約48,900m²が焼失する甚大な被害が発生した。出火時には、最大瞬間風速10m/sを超える強い風が吹いており、隣接する山林の他、約1.4km離れた蔦島でも飛び火による延焼が見られた。

市街地火災への拡大には、大きく分けて、飛び火による延焼と棟伝いの延焼の2つのルートがあり、

近年の火災で言えば、2016年の糸魚川市街地火災では、強風下での飛び火が10か所以上発生したことが、延焼拡大の要因に挙げられている。一方、2024年の能登半島地震後の輪島市街地火災では、地震で建物外皮が損傷を受けたことで防火性能も減損し、棟伝いの延焼拡大が早まったと考えられている。

そこで今回の火災についてみていくと、図2に示す赤枠の内、(4) および (5) は、焼失エリアか

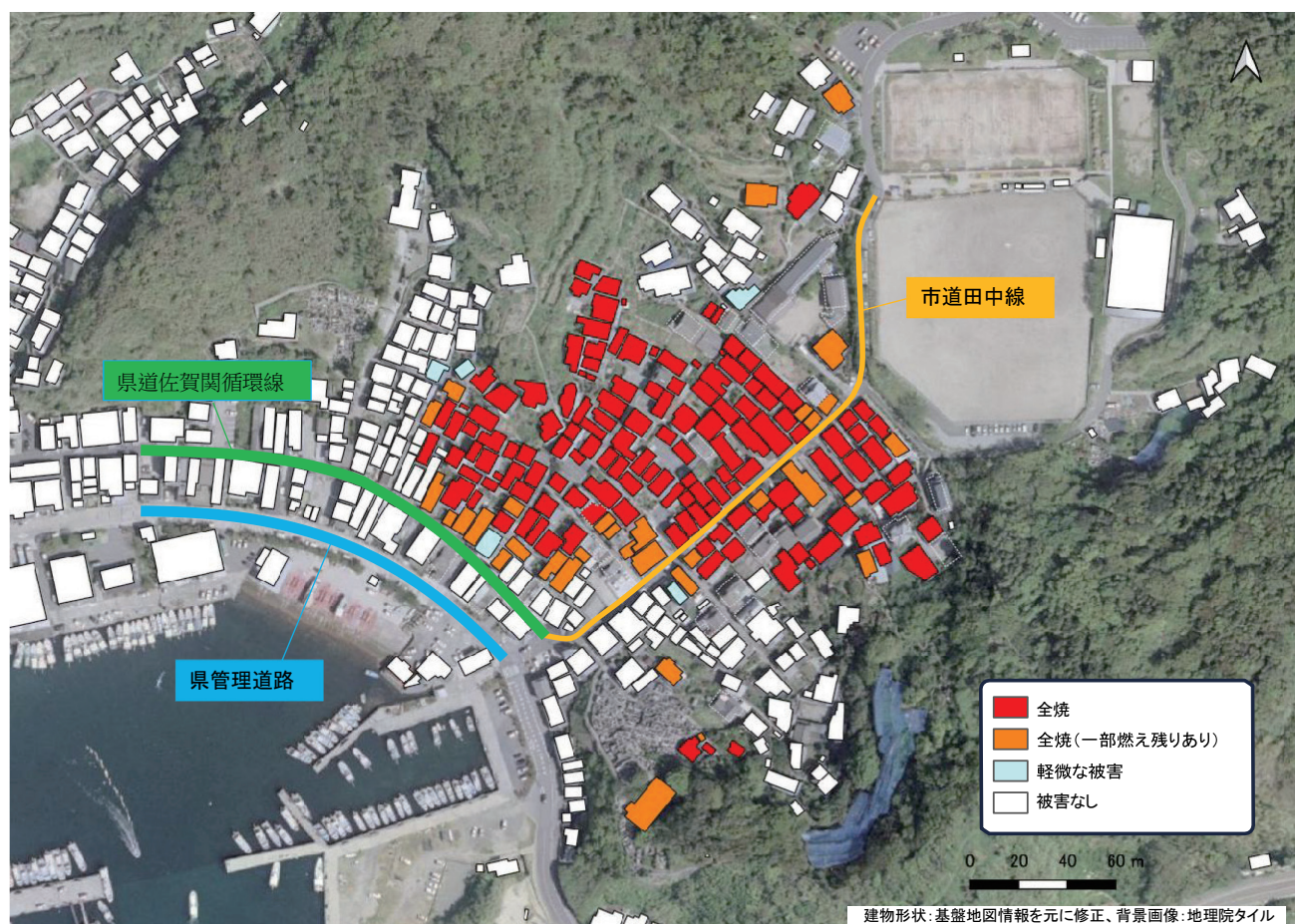


図1 火災で被害を受けた建物の分布

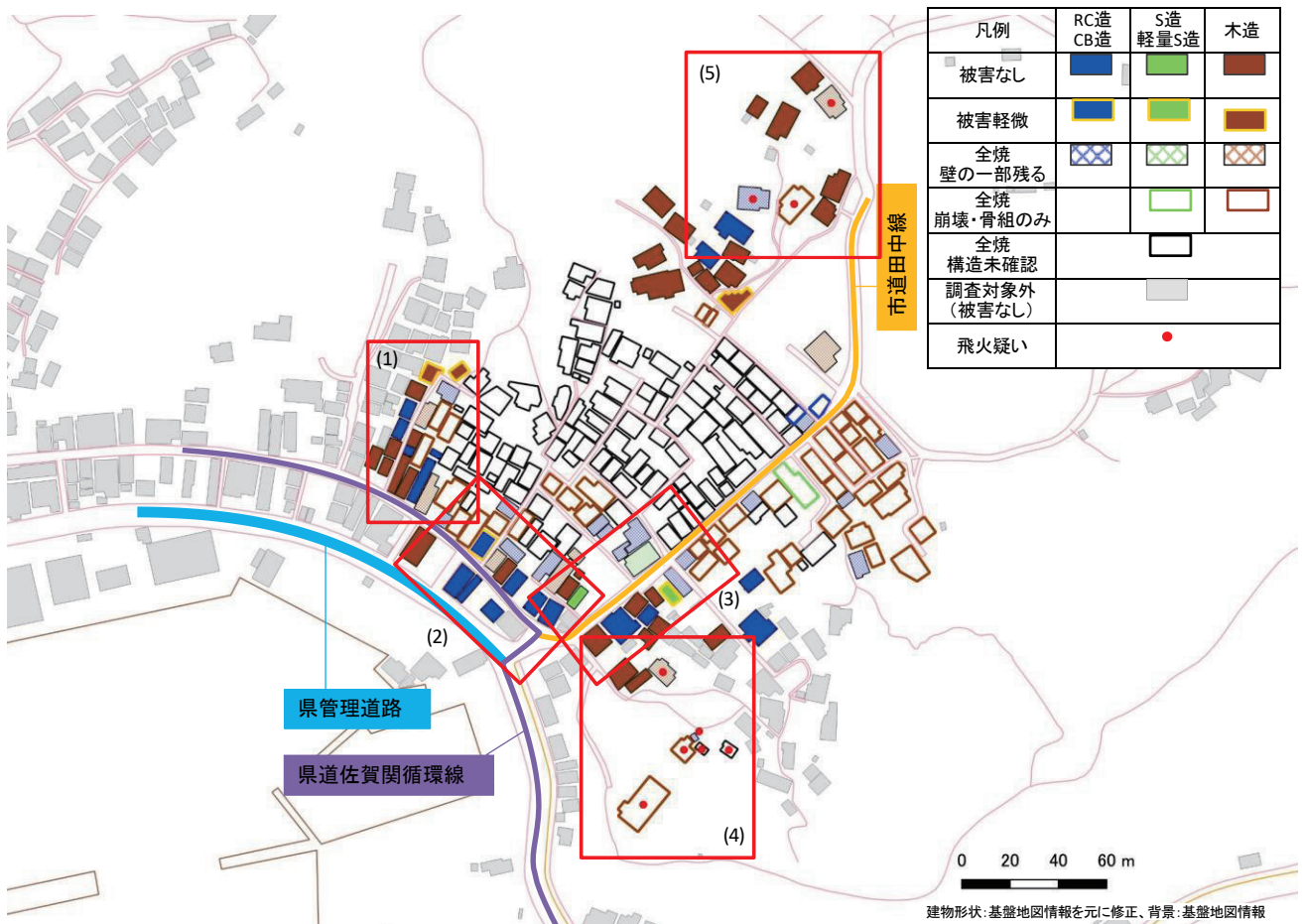


図2 建物種別でみる焼け止まりと飛び火による延焼の状況

ら延焼を免れた複数の建物を挟んだ場所で火災の被害を受けている状況と、火災時の映像から、飛び火による延焼とみられる。ただし、建物周囲の斜面の枯草や樹木も延焼しており、飛び火による火の粉によって、建物に直接着火した以外に、周囲の植生から燃え移った様子も見られた。

赤枠の(1)～(3)は、棟伝いの延焼がとどまった延焼抑止ラインであり、詳しく見ていくと、(1)については、茶塗で示す焼失エリアと同じく燃えやすい木造が密に建て詰まっていたが、出火場所から風上側に当たることで、延焼拡大が局所的に抑えられた。(2)、(3)については、青塗で示すRC造2～3階建ての比較的新しい建物が多く、また空地も多く見られた。車両の進入が可能な幅員のある道路に面していたことで、建物密集地域で懸念されがちな、古くなった建物の除却や建替えの妨げが生じにくく、比較的防火性能の高い建物へと更新が進んでいたことが、延焼抑止に寄与したと考えられる。

飛び火および棟伝いのいずれにしても、折からの

強い風が延焼を助長したことは間違いない。半島部に位置する佐賀関の気象は、海上に近いものがあり、冬季は、晩秋の頃からシベリア高気圧の影響で、北西からの強い風が吹く傾向にある。同様の半島に位置する函館では、明治11、12、40年、大正10年、昭和9年に大火が起こっており、「函館は地続き島で海風に曝されているから、大風のある日に火事を起こすと忽ち燃える（昭和9年朝日新聞）」と評されるなど、火災と風は切っても切れない関係にある。そこで、本佐賀関周辺でも、過去に大火が発生した記録はないか調べてみたところ、木佐上の轟神社の西方、地続きの台地で江戸時代中期に大火で部落が全焼したとの記録が見つかった。

この木佐上という集落は、近年まで人形浄瑠璃で有名な土地であり、今回の火災調査に向かう道すがら、豊後水道を挟んで対岸の佐田岬が見渡せ、浄瑠璃の盛んな阿波の国との結びつきが感じられる。少し気になって調べてみると、轟神社の境内に人形小屋があり、区内の若衆連が中心となって、11月20



海沿いの丘から焼失エリアを望む

県管理道路

写真1 海側の県管理道路側から焼失エリアを望む

日の宵祭り（別名、甘酒祭）に浄瑠璃が興行されていた他、区内の家屋新築の際や、要請によって大分市へも出張興行をしたとの記録が残されていた。この祭日が本火災のあった11月18日に近いのは偶然ではない。「このような厄災が再び起こらないようにと、神の心をやわらげ、神に庇護を願う、厄災除けの祈願に伴う神への奉納興行として人形芝居が行われた」とあるように、季節柄、乾燥と強風により、火災が大規模に発展しやすいことを注意喚起する意味合いがあったのである。

江戸中期においては、井原西鶴や近松門左衛門らによって人形浄瑠璃が発展した時期であり、それまでの武士や貴族中心の歴史物に加え、世話物と呼ばれる実在の市井の出来事から、人々の義理人情を題材とした作品が人気を博した。火災によって荒廃した町の復興に、当時の一大娯楽を持って連帯を図り、一丸となって復興に取り組んだことは注目に値す

る。区民はもちろん、遠くからも人々が押し掛けたと伝わっており、その際の賽銭なども復興に役立てられたのではないだろうか。しかしながら、昭和初期には200年来の伝統文化が途絶えてしまったようである。活動写真などその他娯楽の出現も影響したが、その担い手となった若衆連（男子は15歳を迎えると家族から離れ、寝食を共にする共同生活を送った）も、昭和45年には姿を消したと言われており、近代化による社会情勢の変化が影響したと考えられる。

火災調査からホテルに戻る際に、轟神社に立ち寄ってみると、境内には人形小屋とみられる建物の他、江戸中期に植えられたと伝えられている樹齢200年のイチイガシの大木がそびえていた。

調査から戻り、本誌の原稿を書くにあたって、左官との結びつきを考えていると、司馬遼太郎が昭和50年頃、豊後・日田街道を訪れた際に、当地の左官

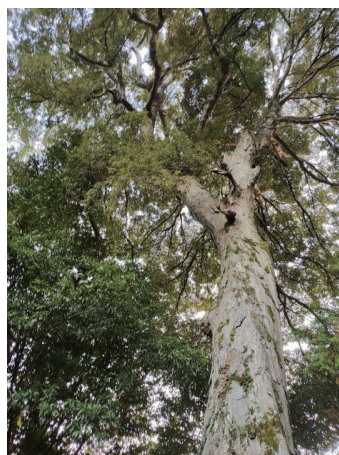


写真2 轟神社脇の人形小屋と思われる建物と、イチイガシの大木

職人から聞いた以下の記述を見つけた⁽¹⁾。

「あのオナゴ竹は、左官の壁作りに使います。土壁を塗るときにオナゴ竹はヨコに使ひ、真竹はタテに使ひます。これを怠ると大雨などが降ったときにどっと壁が崩れるのです」また同書では「長幼尊卑で序列されるタテ社会の中で、ほとんどただ一つのヨコ関係の社会として、同年輩の若者たちが、自分たちで作った自主団体の内的機能、若衆組」に着目し、「村の変事災害にあたって、これを独自に解決し、救済する力の源泉、力の機能、力の管理はどうなっていたのか」と興味を覚えていた。

佐賀関の火災では、狭猥な路地奥で建物更新が難しかったためか、土壁でできた家屋も多く見られたが、建物は古さを帯びていても、土壁は頑丈でしっかりとしたものに見えた。一方で、建物はまだ使用できても、人がおらず空き家が増えている現状や、荒れて放置された藪への延焼拡大が、消火活動を難しいものにした印象があり、旧来の身近な自然素材を活かした家づくりが廃れてしまった影響で、山林火災のリスクも上がっているように感じられた。よって、今後の復興に当たっては、区画整理をして、燃えない街を作れば良いだけでなく、浄瑠璃や若衆連に見られるように、人のつながりを縦横に編み込んでいくような仕掛けを、復興に組み込むことが重要だと思うに至った。

豊後国風土記によれば、「此の郷の中に栲（タク）の樹、多に生ひたり。常に栲の皮を取りて、木綿を造る。因りて柚富（ユフ）の郷という。」とあり、佐賀関を含む大分市の隣町である湯布院のユフの語源は木綿であり、栲などの木の皮を剥ぎ、その繊維を蒸して水にさらし、それを細かく裂いて織った布が盛んに作られていたようである。苧（カラムシ）もたくさん生えており、織ってロープや漁網に使われていたそうである。現地調査で、延焼の1つの要因に挙げられた、荒れて放置された藪の中には、竹小舞の材料になるオナゴ竹すなわち篠竹だけでなく、織物や漁業の道具に編まれた植物もあったのではないかと想像される。否、身の回りの自然環境に材料を求めたこれら伝統工芸が廃れてしまったからこそ、山林や海辺が荒れ、山火事や洪水等の自然災

害の激甚化につながっているのではないだろうか？

それはまた地域社会に根付いていた若衆組の衰退にも通じている。漁村では難破船の救助、山村では山火事の消し止めは、若衆組の公務であり、それに必要な組織的な活動を円滑に行うために、日頃から寝食を共にしたり、心のよりどころである氏神の神事祭礼行事を取り仕切りながら、連帯を強固なものにしていたのである。こうした有志で組織されていた自発的な若衆組は、大正・昭和初期にかけて、国策に沿って方向づけようとする管制化の流れによって、義務的な青年団への変質し、堅苦しいものになっていく。公設消防の設立により、町は安全になったかもしれないが、自分たちの町は自分たちで守るという自負が失われてしまったのである。それでは今一度、原初の自発性を取り戻す手がかりはないかと考えていたところ、湯布院の更に隣町、日田市の江戸時代の偉人、広瀬淡窓が興した咸宜園という私塾にそのヒントが見つかった。咸宜園は年齢、学歴、家位を問わず開かれた私塾として設立され、日中に読み込んだ古典の意味を、夜間には、夜話として爐を皆で囲んで話したり、座禅のごとく静座瞑想して「自得の境地に引きあて理解する」夜学の伝統を築いていた。これは淡窓が目をつけたことで、本に依らない学習を好んだことが発端であるが、失うことで得るものがあるという意味では、火災後の佐賀関にも活かすことが出来るのではないだろうか？夜学は上田利男がいうように⁽²⁾「社会の下積みに生きる草莽の人」すなわち昼耕夜読の生活を励ます他、実践的な学問を志すものである。佐賀関の復興まちづくりを公的な機関に任せるだけでなく、市民が一丸となって話し合うために、また自分たちの町は自分たちで作るという自負を呼び起こすために、咸宜園に倣った夜学・私塾を開校してはいかがだろうか？

取っ掛かりとして浅はかではあるが、風土記や万葉集にも詠まれた織物を用いた町おこしを考えてみた。元々、関サバ関アジで有名な佐賀関は漁師町であり、この海域の特徴である潮流の速さが身の締まった魚を育てる他、波が高く海底の起伏が複雑なことにより、「一本釣り」の漁法が発達しブランド化されている。そこで天然素材であるカラムシを用い

(1) 司馬遼太郎、街道をゆく8豊後日田街道、朝日文庫

(2) 上田利男、夜学—こころ揺さぶる「学び」の系譜、人間の科学新社

たロープやタモ網などの伝統工芸を再興し、魚への傷や負担を更に抑えてブランドを強化することも一案であろうし、樹皮を用いた織物を再興し、古代布による漁師ファッションを考案できれば、風土記に連なる伝統と新たな流行の融合により、漁業のイメージを刷新し、漁業を志す若者も増え、復興後の佐賀関に賑わいを取り戻すことができるのではないだろうか？

加えて建築の分野においても、地域に眠る興味深い伝統の技を紹介したい。佐賀関から内陸に少し入った位置にある大分県日田市は、江戸時代、幕府の直轄領として商人の町として栄えた地域である。江戸・明治期の三度の大火で培った防火への備えが、今に伝統的建造物群保存地区として残る豊かな町並みを形成していると言われている。隣り合った建物への延焼を防ぐ卯建（うだつ）は、他の古い町並みでもよく見られるものであるが、防火上、弱点部となりやすい開口部に対して、昆布の細かい繊維を筵（むしろ）のように編み上げた昆布のれんをかけるという独自文化があるそうだ。「明日を守る～防災立県をめざして」第32回大分合同新聞社には、「軒先にぶら下げて水をかければ二倍に膨らみ、即席の防火シートになる」という記述がみられる（写真3）。漁業と織物、一見何のつながりもなさそうな2つの分野が、昆布のれんで1つに編み込まれた好例である。我が建築研究所では、その効果を現代の建築基準法に照らし合わせて測定することも可能であるし、現代の最新技術と融合した更なる工夫など、喜んで協力を申し出たい。

漁師の家も商家に劣らず、漁具の出し入れなど広

い間口が必要であろう。身の回りの自然環境の整備にもつながる土壁の町並みを、地域の消防団に所属する若者が、地域の安全を自らが担っているという自負に胸を張って、古代布で作られた粋な絆纏をひるがえし闊歩する。その間口には大漁旗ならぬ昆布のれんがぶら下がり、そして関サバ関アジを求めてにぎわうお客さんをお迎えする復興後の町並みを想像してみしてほしい。単に広い道路や燃えにくいコンクリートの建物を並べるだけでなく、地域の生業と独自文化が、町並みとして目に見える形で現れた復興まちづくりこそ、佐賀関の目指すべき未来だと思われる。

本号では佐賀関の火災に端を発し、同地区が江戸時代の大火からの復興に浄瑠璃を興行した例を挙げて、地域の生業と文化を編み込んだ復興まちづくりについて考えてきた。「江戸はネットワーク」を著した田中優子が言うように「浄瑠璃を奉納するのは、能や絵馬を奉納するのと同じで、「座」にエネルギーをもたらすものと捉えられていた」。「座」や「社」、「連」による個人に閉じられていない創造の方法は、何も芸術に限られるばかりでなく、復興まちづくりという「場」の創造にこそ有用と考え、佐賀関の関サバ漁法―湯布院の古代布―日田の咸宜園と、大分の町と文化を「連」ねて考えてみた。田植え歌やヨイトマケのように、複数の人間によって「ノリ」が生じると、個々が1人で何かを行う場合の数倍の力を発揮するそうであるから、今後の佐賀関復興に向けて、大分がそして日本が一丸となって取り組んでいければと願い、筆を置きたい。



写真3 昆布のれん